

地政学的意識と批評

成瀬 厚*

I はじめに

地政学, Geopolitik, geopolitics, géopolitique に関する議論は近年地理学内で盛んに行われるようになっていっている。いわゆる「地政学」¹⁾をめぐる議論は、チェレンの時代から現代に至るまで、そしてドイツ、日本、イギリス、アメリカ、そしてフランスにまでわたり、これらを網羅することはとてもできない。本稿の目的はこれらの一部でも概観することではない。近年の議論の多くは個々のゲオポリティカーの論理的・一貫性を検討したり、その主張を社会的文脈において評価しようとする傾向にある。

本稿では、こうした立場とは別の観点から、地政学に対する新たなアプローチを提示することを試みる。すなわち、地政学を、この名称である特性を伴った一学問分野に関わるテキストの総体としてではなく、あらゆる表象形態に侵入する一つの意識（本稿では以下、地政学的意識という用語を用いる）としてとらえようとする。そして地政学の問題意識はこれまでの意味内容（学問分野としての過去の遺産）から拡張され、地理的記述の政治性を明らかにするような研究へと導くためのキーワードとなる。

本稿で筆者は以下のような展開で議論を進める。まず、筆者の目に触れた学問分野としての地政学に関する議論のなかから、とくに地政学が批判の対象となってきた論理的根拠・政治的理由に着目し、筆者の主張との接点を見出す（第II章）。そして筆者

の主張に近い存在である批評家、エドワード・サイード (Edward W. Said) の議論を概観する（第III章）。その議論を通じて筆者は地政学を学問領域としてではなく、表象されたテキスト・言説として、あるいはそれらに刻まれた意識としてとらえようと試みる²⁾。よって次には、そうしたテキストなり表象なりを分析するために、文芸批評におけるテキスト論を参照する形で、地政学への接近法を提示する（第IV章）。

筆者のこうした関心に伴い、本稿では地政学を、国家における相異や表象主体による相異を強調したり共通部分をまとめることによって分類することなどはしない。むしろ「地政学」という語を用いて可能となる議論を包含する形でこの語を用いることとしたい。

II 問題意識としての地政学論議

本稿に関わる問題点は、学問分野としてのかつての地政学が似非科学と見做され、流行現象として戦後急速に衰退していった理由と関連がある。すなわち、第1にその政治的態度が明白で、価値中立的な科学とはなりえなかったこと、第2にそこで示された国家間関係は実体としてのものというよりはそのゲオポリティカーの観念上の産物であったこと、換言すれば、それはきわめて主観的なものであったことである。これらは単なる否定されるべき事実としてではなく、学的営為における二律背反的な要素として再び問い直す価値があるものである、というのが本稿における筆者の一つの主張である。こうした点に沿って以下では、①政治的正当化としての地政

キーワード：批評、地政学、イデオロギー、記述行為

*東京都立大大学院

学、②心象地理³⁾としての地政学、③テキストとしての地政学的表象、④大衆文化のなかの地政学的言説、の順に議論を進めることにする。

まず第1点目については、周知の通り、過去のドイツにおけるゲオポリティクはその生物学的隠喩による国家有機体説がナチス政権との結び付きによって政治に応用され、日本においても大東亜共栄圏思想のもとに地政学が流行した、というのが一般的見解である。地政学を社会的文脈で解釈するいくつかの論者が示しているように、地政学者の言動を規定した時代的・社会的な条件が存在する。しかしながら、後に示すように、地政学テキストはいくつかのレベルにおけるイデオロギーの産物であり、同時にいくつかのレベルの形式の織物として解釈される必要がある。よって、地政学的記述に顕れた政治性は、作者個人に帰することも社会全般に帰することも十分ではない。また多くの地政学的記述は自己の立場を明白にし、それを正当化しようと自らの論理を構築しようとする点で、読者に対して説得的であったという点は評価されるべきである。

第2点目については、過去の地政学の国家有機体説が帝国拡張の論理の根拠を自然環境という非主体に帰したことや、マッキンダー (H. Mackinder) のハートランド理論が実体を表象しているというよりも地戦略 *geostrategy* としての観念上のモデルであったこと⁴⁾、によって地政学が似非科学として見做された事実に関連している。今日論じられている権力関係や勢力均衡を含む「世界秩序」が実体であろうか。筆者はむしろ、蠟山 (1948, p. 4, pp. 5-6) の「国家や政治という現象は、容易に一つの理論や法則によって、経験科学として成立し得ないものである」がゆえに、「国家や政治は根本的には人類の意志現象であり、従って社会現象なのである」という見解、また日本地政学の根拠を皇道に求めたことで有名な小牧實繁の「政治といふものが主體性と中心とを考えずしては成立し得ないものである」

(小牧, 1932, p. 2) という意見に同意せざるをえない。たとえば、権力関係というものの一つの指標として軍事力でそれぞれの国家の強弱が判断されよう。そして現実に冷戦と呼ばれる時期には、お互いに相手の戦略を見極めながら軍事的な意志決定を行っていたといえる。国家間関係は強弱だの、勝敗だの、けっして客観的とはいえない尺度で論じられるのを我々は目にしていないだろうか。こうした意味で政治的な国家間関係の議論はあくまでも解釈であるといえる。まさに国際関係を扱う場合、現実と表象という二分法は存在しえない。政治における現実とは、さまざまな意図を持った主体によって表象された言説の総体である。

第3点目は、2点目と関連している。過去の学問分野としての地政学や現代の政治家の地政学的表象に対する批判的な解釈においては、その表象に作者の政治的態度が反映し、正確な地理(学)的表象とはなっていないことを問題としているといえる。短絡的に考えれば、そうした地政学批判は、一方でさまざまな政治的態度に基づいて生産された地政学的言説を批判的に解釈し、もう一方で科学的な解釈で地理学者が地政学的言説を生産するという仕事を課しているにとらえられるかもしれない。しかしながら、ラコスト (Y. Lacoste) 編集の『地政学事典』を評した柴田によれば、「科学的データに基づこうが神話に起源があろうが、地政学的表象は多少なりとも論理的で整合する複数の構想によって構成される」(柴田, 1994, p. 483) ものであるという⁵⁾。このようなラコストの主張を受け入れるならば、テイラー (1991, 1992) の構想する世界システム論に依拠した、「自国中心的な性格を排除し、相対化された」地政学的秩序を表象するという政治地理学の役割 (高木, 1993, p. 403) にも批判的に吟味すべき点は存在する。もし仮に誰にとっても説得的な科学的な地政学的表象が可能となったならば、それは誰にとって何の意味があろうか。政治的事象を表象

の対象とする場合、政治から逃れることはできない。我々はあらゆる地政学的言説をテキストとして詳細に吟味する必要があるのである。その際に、文芸批評は方法論的にも、認識論的にも非常に重要になってくる。

第4点目については拙稿（成瀬，1994）で簡単に触れている。地政学的言説なり，地政学的表象なりは，それが表面上科学的なものを装ってしようが，政治学者の言であろうが，文化に見出される対抗的な意識であろうが，すべてが等しく批評の対象となり得るのである。そうした意味で，文化やメディアは強調されるべき存在である（柴田，1994，p. 484）。

ここで，筆者と同様の視点から大衆文化における地政学的言説に着目する Sharp（1993）の主張をみてみよう。Sharp はまず，最近の新しい地政学をポスト構造主義からの，客観的な社会調査への批判を目論んでいる，という点で評価する。政治家や彼らへの知的助言者による地政学的著作に描かれる世界秩序は，発見されるというより，むしろ想像されるものである。よってこの新しい地政学は，社会的に構成された地理的秩序の性質を暴くような批判的研究にまで拡張されるという。さらに Sharp は，批評の対象とする言説は政治家という政治エリートに限らず，初等教育やメディアによるテキストにも同等の比重で焦点が当てられるべきであると主張する。なぜならば，政治家は生まれてすぐに政治家であるわけではなく，彼らが社会化されるその過程において，教育やメディアは重要な役割を果たしているからである。

教育やメディアにおける地理的表象はステレオタイプの宝庫であり，国家は世界を理解する上での強調されるべき単位である。そして国家の名称を伴う世界の出来事は常に自国との関係において語られる。この主張はテキストの自律性の問題にも関わってくるのであるが，政治エリートの地政学的言説を彼独自の解釈であると結論づけることはできないはずで

ある。

世界や国家というスケールは経験上実感できるものではない。有機体論という一つの隠喩はそうしたスケールを理解し，他人に説得する上での一つの方法であり，正誤の問題ではない（Buttimer，1993，p. 159，p. 180）。今日における我々の世界スケールの地理的感覚もさして変わらない。国家を人間と同様の主体と見做して個々の出来事を解釈しようという発言はここかしこに見受けられる。そしてその主体のアイデンティティは，近代国民国家形成期に創られたにもかかわらず，その国家の長い歴史のなかで培われたと見做されている国民文化に帰属する⁶⁾。

III サイドにおける地政学的意識、 あるいはオリエンタリズム

なぜサイドなのか？ このような問いを発するより先に，なぜ日本の地理学において彼の著作が無視されてきたのか，と問うべきではなからうか。現象を認識し，言語によってその解釈を表現するという社会科学において，近年，批評的方法はますます重要な意味を帯びてきている。フランスの哲学者ミシェル・フーコー（Michel Foucault）は批評の対象を歴史記述に求め，そのことは歴史学に大きな影響を与えた（ホワイト，1984；オブライエン，1993）。一方，その批評対象として地理的な主題を選択してきたサイドの議論は，地理学にとって非常に魅力的である。

サイドの主張は，1978年に発表された『オリエンタリズム』（サイド，1986a）によって注目された。彼の議論は一般的にあって，フーコーの言^{ディス}説概念を援用し，自己と他者の問題，それに伴う知と権力の関係，二つの語義を持つ discipline（規律＝訓練，学問分野）の問題，そして representation（表象，再現，代表）の問題を扱っている。そして同時にサイドは，ウィリアムズ，とくに『田舎と都会』（ウィリアムズ，1985）からも影響を受けて

おり、ウィリアムズの仕事を「イギリスの文学や社会とは異なる文学や社会にも適応できる」(サイド, 1991, p. 58) として自らの立場を位置づける⁷⁾。その一つの成果が『オリエンタリズム』に現れるわけであるが、フーコーの議論がすでに存在していながら彼のそれが注目されたのは、その対象が地理的な事象に向けられたことにあろう。そしてそのことこそ、サイドの議論が地理学にとって参照されるべき存在として現れる所以である。

『オリエンタリズム』では、自己としての西^{オクシデント}洋が東^{オリエント}洋を他者として扱ってきた歴史について詳述される。この著作ではじめに現れる「オリエンタリズム」の定義には「地政学的意識を、美学的、学術的、経済学的、社会学的、歴史的、文献学的テキストに配分すること」(サイド, 1986a, p. 12) とある⁸⁾。世界の理解はある種の意図に基づくものであり、その意図は世界の支配という政治的目的に結びつく場合もある。そこで採られる科学的方法(東洋学のみならず、文学やその他の表象においても同様の方法が採用される)はその意図を精緻にし、また科学における大学という制度化された領域において、その理解は規律を生み出す。オリエントという外部は知識の対象として必要であり、その異質な外部によって正常な内部との境界が確定=画定されるのである。ここでの「地政学的」という語は特定の学問分野を指すだけでなく(東洋学は一種の学問分野としての地政学である)、地理を知の対象とした近代以降の一つの政治的意識として、あらゆる知の様式に分配されているということである。

サイドの文学作品に対する省察は、『オリエンタリズム』発表以前の1975年に発表された『始まりの現象 *Beginnings*』(サイド, 1992)においてなされている。そこでは主にテキスト論をめぐる作者の書く行為、すなわちエクリチュールに焦点が置かれている。書く行為に出発点を置く議論は、その行為が所与のものでないためにそこから生じる

テキストの存在もまた所与のものではないことが論証される。『始まりの現象』のなかの「テキスト」の定義において、サイドは「代用品 *substitutes*」や「代置物 *substitutions*」という表現を用いている。テキストとは一人の人間が作者というアイデンティティを持った一個人となるべく生み出されたものであり、一つの現実的な行為である。まさに、ゲオポリティカーがその時代状況で正当な政治家となるべく、地政学テキストは生み出された。エクリチュールとは事前に存在する作者の意図や社会背景などを反映するものではなく、むしろ書く行為そのものに社会的文脈における作者の意図が埋め込まれるのである。

ジョーゼフ・コンラッド研究に始まった彼の著作活動は、『始まりの現象』で小説、エクリチュール、精神分析から構造主義に至るまでの省察を通じて、『オリエンタリズム』を生む。『オリエンタリズム』での作業を通じて、彼の関心は知/権力の問題へと集中していく。人間による知識の生産というものは必ず興味とその対象を必要とする。「『興味』は必要から生まれ」(サイド, 1986b, p. 164)、政治的・地理的な意味を伴う。その知識は追隨者によって反復され所有され、そのことが共同意識を生む。それがすなわちアイデンティティの形成であり、同時に社会秩序や規律=訓練を生み出すのに寄与する。その時知識は同時に権力であり、メディアや教育を通じて知識は獲得することが強要され、獲得できない者は逸脱者(異常者や狂者)と見做される。

では、地政学的意識とは何か? 記述行為においては、三つの主体が想定される。それらはすなわち記述主体、読者、そして記述対象である。それらの関係は多くの場合、語り手と聞き手が同じ社会的コンテクストを持ち、記述対象は知の素材を提供するのみの第三者である。戦時下の状況にあてはめれば、政治家・国民・敵国の関係である⁹⁾。この対象は対話の相手として存在するのではない。そうした他者

への眼差しは必然的に政治性を帯びるであろう¹⁰。地理的な記述における他者とは同時に「他所」でもある。

繰り返しになるが、サイドは従来哲学的・認識論的問題として扱われてきた自己と他者の問題を政治的な問題として再認識し、西洋と東洋という具体的、かつ地理的な関係において例証した。それが「オリエンタリズム批判」という特殊問題として名付けられたわけであるが、筆者はサイドが扱った問題の一般的名称として「地政学批評」という語を用いたい。オリエンタリズムとは「現実についての政治的ヴィジョンなのであり、身うち（ヨーロッパ、西方、「我々」とよそ者（オリент、東方、「彼ら」とのあいだの差異を拡張する構造をもつもの」（サイド、1986a, p. 43）と定義されるが、根本的にその名称は固有名詞である。この定義をより一般的に拡張すれば、「地政学的言説の本質的な重要性は、空間を『我々の』場所と『彼ら』の場所へと分離することである」と Dalby (1991, p. 274) がいうように、「地政学」という名称を用いることができよう。地政学という語は、現代的状況において、過去の遺産とは訣別し、地理学を含む地理的記述が必然的に政治性を帯びるという点を意識するために有用である。

IV 文芸批評の方法

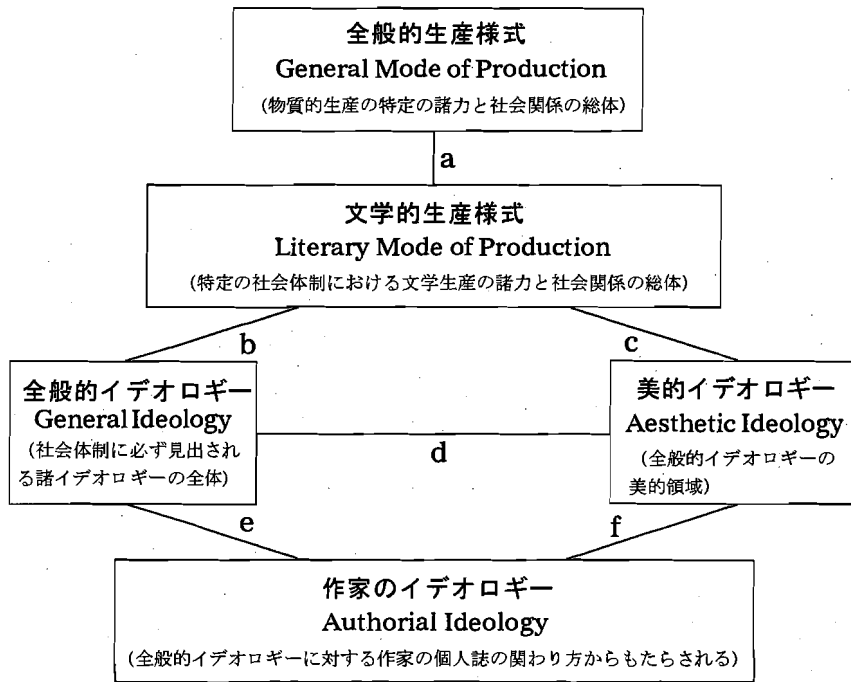
このような立場からは、我々が批評の対象とするべきものは我々に現前してくるテキストということになる。ここでは、テキスト分析に対する枠組みを、主にテリー・イーグルトン (Terry Eagleton) の『文芸批評とイデオロギー』（イーグルトン、1980）に従って提示する。同書は英国においてカルチュラル・スタディーズの流れを担ってきたレイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) の議論を批判的に展開させたものとして重要であるといえる。しかしながら、イーグルトンの関心は理論的な議論

に集中している感が否めず、そうした意味でウィリアムズの政治的な関心と相容れない部分が生じていると筆者は考えている。よって、本章では両者の議論を念頭に置きながら、地政学批評の分析枠組みを提示したい。

まず手順として、ウィリアムズの議論をとくにその政治的態度に焦点を当ててみていくことにする。彼の初期の著作活動に一貫してみられる社会認識は以下の主張に要約されているといえる。

「われわれの世代にはいつてからは、このコミュニケーションの世界にたいする関心は劇的な高まりをみせた。新しい強力なコミュニケーション手段の発展は、歴史的には民主主義の拡大と一致し、また様々な支配グループの民主主義をコントロールし操作しようとする試みと一致している。この発展は、さらに、労働と教育の性格に重要な変化の起きたときとも一致しており、それは多くの人々に新しいかたちの社会的機会を与えてきている。日常的な社会生活のスケールは、この新しいコミュニケーション機構や多くの巨大組織の成長によって大幅に拡張されてきた。これが相まって、まったく新しい種類の社会問題が生み出されているのである。」(ウィリアムズ、1969, p. 18)

同書には、ウィリアムズのより政策的な意味を含んだ明確な解決策が提示されている。それはすなわち、資本主義的な制度を廃止することであり、とくにコミュニケーション手段をその当事者の手に取り戻すことである。その革命の方向性は既存の社会主義革命とは異なる。それは「組織・機構の変革と個人の態度の変革とを二者択一的なものとして考えていつてはならない」（ウィリアムズ、1969, p. 12）という彼の主張にうかがえるものであり、彼が後者の「個人の態度の改変」にとくに重点を置いていることは明らかである。このような政治的態度のもとで、彼は同書において丹念な内容分析を用いて、当時の英国のマス・コミュニケーションの実体を明ら



a	文学的生産様式は全般的生産様式の下部構造であるが、両者は弁証法的関係にある。文学的生産様式は全般的生産様式からある程度の自律性を持っている。
b	文学は全般的イデオロギーの闘争の担い手。文学的生産様式は全般的イデオロギーを持続させる役割を果たす。全般的イデオロギーは文学的生産様式に対し、検閲という役割を果たす。
c	全般的イデオロギーと文学的生産様式の間になり立つ相互生産的な関係としての「文学的生産様式のイデオロギー」が、美的イデオロギーに組み込まれる。
d	全般的イデオロギーと美的イデオロギーは生産過程と消費過程とを決定する。この両者の関係は込み入った問題を孕んでいる。
e	全般的イデオロギーと作家のイデオロギーの関係は、美的イデオロギーが介在することによって変化する。
f	作家のイデオロギーは、文学的生産様式の決定とともに、美的イデオロギーの選択の決定にかかわる。

第1図 イデオロギーおよび生産様式の諸カテゴリー間の関係
 Fig. 1 Relations among categories of ideologies and modes of production

かにしているのである。

しかし一方で、ウィリアムズは「大多数は芸術に関心はもたず、娯楽に関心を持つにすぎないのである」(ウィリアムズ, 1969, p. 115) などという言明を残している。こうした言明はイーグルトンによる批判を生む。そして『『文化』がすなわちイデオロギー的な言葉であることを意識していないのは致命的と言わざるを得ない」(イーグルトン, 1980, p. 27) というウィリアムズへの批判を提示してイーグルトンのイデオロギー批評は展開していく¹¹⁾。

それでは次に、初期ウィリアムズの議論におけるイデオロギー概念の欠如を指摘したイーグルトン自身の主張をみていくことにしよう。「文芸テキストはイデオロギーの『表現』ではなく、イデオロギーも特定の社会階級の『表現』ではない」とイーグルトン (1980, p. 85) が論じるように、イデオロギーは文芸テキストの生産過程によって産み出されるのである。そこでイーグルトンは第1図に示したようなカテゴリーに従って、テキスト、イデオロギー、生産様式との関連を論じている。第1図は各々のカ

テグリーの関係についてのイーグルトンの説明を基に筆者が作成した。イーグルトンが設定したこの「イデオロギーと生産様式」というカテゴリーは、サイド (1992) が『始まりの現象』の副題に選んだ「意図と方法」に合致している。作者のエクリチュールにはいくつかのレベルにおけるイデオロギーと生産様式が介在し、作者は名前という能^{エン}記^{フィクション}を伴ったアイデンティティを通じてテキストに社会というコンテキストを具現化していく。我々の批評の目的は、地政学的意識を表象した言説に焦点を当てることによって、それを取り巻くさまざまな表象がお互いに論理的な一貫性を保ちながら闘争している場として、テキストを分析することなのである。

ここでのイーグルトンの議論は文学テキストに限定されているが、彼の議論の含意も本稿での地政学の議論に拡張することができる。イーグルトンの議論では文学生産においてさまざまなイデオロギーが介入するということであるが、本稿ではさまざまな文化形態に地政学的意識という特殊なイデオロギーが介入するという意味において、この図式が有用であるといえよう。すなわち、本稿では文学的^{文学的}生産様式の部分がさまざまな生産様式——文学、絵画、映画、音楽、建築、政治的文書、雑誌、新聞など——に対応する。

第1図の図式は作者についてのものであり、6番目のカテゴリーとして「テキスト」が設定されている。我々に現前する唯一の物理的存在であるテキストは、他の主体が介入する「場」となる。テキストを媒介とした主体同士の掛かり合いは、批判されるべき側面と評価されるべき側面の二つの含意を持つ。作者という主体は彼(女)の自己同一性^{セルフアイデンティティ}を常に前提とするわけではない。作者は時に、より上位のアイデンティティを自己に投影する。すなわち、それが国家であれば国民として、民族であれば民族主義者として、政治的立場であれば右派や左派としてエクリチュールがなされる。テキストへの掛かり合いの

批判的側面とは、そうした全般的イデオロギーのもとに生産されたテキストをめぐって作者と読者が共謀の上により広いアイデンティティを築き上げ、その記述の対象となった他所は他者としてラベリングされるということである。その一方で、テキストとは公表された瞬間に社会的存在となり、作者の意図を離れた解釈が可能となる——自由な読みの存在(ド・セルトー, 1987)。そして、テキストは他の主体が作者に働きかける場となる。批評とはこのような重要な役割を課せられている。

すなわち、この二つの含意のうち前者が批判の対象となる地政学的意識を介入させたテキスト、あるいは竹内(1986)のいう「現状維持のゲオポリティク」であり、後者が地政学批評、あるいは「対抗ゲオポリティク」¹²⁾であるといえる。

地政学的意識とは一つの政治的実践を支えるものであり、ある種のイデオロギーである。イデオロギーの一つの特殊な形態としての地政学的意識は、自己と他者の政治的関係における広がりを持った場として地理的空間が作用し、あるいは修辞法として利用されるようなものである。我々に対して、そのような意識は表象されたテキストを通じてしか現前することはない。そうしたテキストとして、かつての学問分野としての地政学的著作、対外政策などの政治的表明、そして我々の一般的な社会生活の場に溢れている文化的表象などが挙げられる。

V おわりに

本稿は、英語圏の地理学における geopolitics に関する近年の議論¹³⁾を射程に入れつつ、地政学——政治性を伴った地理的記述——を対象とした批判的研究の方向性について概観したものである。第II章ではかつての地政学が政治性を孕み、主観的であったという批判点に着目し、その批判点の中から評価されるべき点を見出した。第IV章では地政学的表象の分析のために文芸批評の議論を参照したが、そこ

では第Ⅱ章を受けて、ウィリアムズからは批評における政治的立場を、イーグルトンからはテキストに対する認識論を引き出すことを試みた。これらの議論から、我々は学問分野としての地政学に対する従来の批判の多くが十分なものではなく、我々の日常生活においても批評の対象となるべく地政学的表象が氾濫しているということが確認できる。筆者は、現代的状況においては後者の分析により焦点が置かれるべきであると考え、そして第Ⅲ章は、サイドのオリエンタリズム批判を参照することで、地政学を批評の対象とすることの重要性を記すために挿入されている。

我々が今日、地政学 geopolitics という語を一学問分野としてではなく用いる意義は何であろうか。それは、英語圏における最も注目すべき地政学研究者である Ó Tuathail (1994) と同様に、日本語の地政学を、地—政—学とハイフンで区切ることによって説明することができる。ここまでみてきたように、地理的な記述を行うということ、——すなわち地理であり地理学である geography——が必然的に政治性を帯びるのではないかという仮説が提示できる。Ó Tuathail and Agnew (1992, p. 192) の言葉を借りれば、「地理学はイデオロギーから外部政治を分離するような自然的現象でも非推論的現象でも決してない。むしろ、言説としての地理学は知／権力それ自体の形式である」。一方、学問分野としてではなく「学」という語を用いるのは、学問分野に限らず知に関する営為、あるいは記述するという営為のことを意味するからである¹⁴⁾。そして、そのような営為の対象として、「地理」というものは多くの場合、そして重要な意味を持って機能する。

本稿は、1995年1月に東京都立大学大学院理学研究科に提出した修士論文の第Ⅱ章を基礎とし、加筆修正したものである。

(投稿 1996年4月26日)

(受理 1996年12月7日)

注

- 1) この「地政学」という語はドイツ語の Geopolitik の訳語であったが、第二次世界大戦中には日本独自の展開もみられたので、現在では単純に Geopolitik の訳語として扱うことはできない。用語に関しては高木 (1993) が簡単な考察を行っている。参考までに記しておく、福岡 (1991) はドイツ語の Geopolitik の訳語として地政学を用いることはできるが、英語の geopolitics は地政学と訳さないとしている。一方、竹内 (1974, 1986) は日本の過去の地政学に対する批判と、ドイツやフランスにおける動向の紹介も行っているために、一貫して「ゲオポリティク」と表記している。またテイラー (1991, 1992) の訳者、高木は英語の geopolitics を「地政学」と訳出している。
- 2) それは、近年多くの著作が、本文で地政学の語をほとんど用いないにもかかわらず表題に地政学の語を掲げている (ヴェリリオ, 1989; 上野, 1990; ウォーラーステイン, 1991; Jameson, 1992) という状況をも考慮している。これらの著作において地政学の語は意味内容を持たないジニフィアンとして用いられている。
- 3) 心象地理 imaginative geography はサイドによる用語である。明白な定義は与えられていないが、それは「精神が自己の身近にあるものと速く隔たっているものとのあいだの距離や差異を劇化し」、「自己意識をいっそう強固なもの」(サイド, 1986a, p. 55) にする役割を果たすという。また、多木 (1980, p. 17) が「人びとが想像力のなかで世界を切り分ける仕方」として用いている「隠喩的な地理学」もこの概念に近い。なお、サイドの心象地理と心象歴史の概念を援用したものとして、姜 (1989) がある。
- 4) たとえば、岩田 (1956, p. 173) は「しかしこうした〔政治地理学が試みてきた：引用者〕世界展望は科学的手法による解明というよりは、むしろその人達の識見による『カン』に属する記述が多かった」と述べている。
- 5) なお、筆者の言語能力の制約から、最も興味深いと思われる近年のフランスにおける地政学の議論を参照することはできず、わずかな日本における紹介に負っている。柴田 (1994) の他には、竹内 (1980, 1986) から断片的に知ることができる。
- 6) 筆者と同様の関心から、国民文化を問い直そうという試みが西川 (1992, 1995) によってなされている。
- 7) このサイド (1991) の論文は1988年に亡くなったレイモンド・ウィリアムズに対する追悼講演をもとにしたものである。ここではウィリアムズの『田舎と都会』にならって、フランスの当時の植民地であったアルジェリアを舞台にしたフランスの小説家カミュのテキストの分析を試みている。

- 8) この部分は Dodds and Sidaway (1994, p. 516) にも引用されている。なお、この論文には「フーコー、サイド、批判的地政学」と題された章があり、フーコー (1988, p. 57) の地理学に対する発言も共に引用されている。
- 9) 戦時中の『ナショナル・ジオグラフィック』を分析した山田 (1988) を参照。
- 10) こうしたテキストをめぐる主体間の関係は、「立場の政治 politics of position」(Duncan and Sharp, 1993, p. 481) として論じられる。
- 11) イーグルトンは近年になって、『文芸批評とイデオロギー』で展開したウィリアムズ批判は、「比較的若かった頃の性急な苛立ちゆえに排撃してしまった」(イーグルトン, 1989, p. 75) ものであったと回想している。この論文は *New Left Review* 誌に寄稿されたウィリアムズ追悼講演の内容であり、ウィリアムズの人となりを知らせてくれる。
- 12) それは、支配的な地政学的意識に対抗する意識を表明することを意味する。Sharp (1994) はそうした文化的作品の一つとして、ラシュディの『悪魔の詩』を取り上げている。
- 13) 英語圏の近年の議論は critical geopolitics という名称の下に括られる。わが国でもこの分野に言及したものが存在するが (Nakashima, 1996; 高木, 1996), 本稿ではあえてこの訳語としての「批判的地政学」という用語は使用していない。それは、この分野が1990年代に活発化したもので、まだ整理できる段階にないこと、また、筆者の考える批評的研究にこの語をあてることは不適切であると考えたためである。なお、この分野を簡単に概観した Dodds and Sidaway (1994) の四つの分類——フーコーとサイド、デコンストラクション、地政学的経済、発展(開発)研究——に本稿を位置づければ、前二者にのみ関連しているといえる。
- critical geopolitics に関しては *Environment and Planning D: Society and Space* (1994年, 第12巻5号) と *Political Geography* (1996年, 第15巻6/7合併号) で特集号が組まれている。
- 14) 日本語の「学」という語は何も学問分野のこのみを意味しない。例を挙げれば、文学や哲学、修辞学、形而上学など。ウィリアムズ (1980) が指摘しているように、社会的や心理学的といった形容詞も今日ではより一般的な意味を獲得している。

文 献

- イーグルトン, T. 著, 高田康成訳 (1980): 『文芸批評とイデオロギー——マルクス主義文学理論のために——』, 岩波書店, 326+xii p. Eagleton, T. (1976): *Criticism and ideology: a study in marxist literary theory*. Verso, London, 191p.
- イーグルトン, T. 著, 関口正司訳 (1989): レイモンド・ウィリアムズの死——希望の旅に遺されたもの——。みすず, No. 335, 75-87. Eagleton, T. (1988): Resources for a journey of hope: the significance of Raymond Williams. *New Left Review*, No. 168, 3-11.
- 岩田孝三 (1956): 政治地理学の新しい問題。人文地理, 8, 165-175.
- ウィリアムズ, R. 著, 立原宏要訳 (1969): 『コミュニケーション』, 合同出版, 215p. Williams, R. (1966): *Communications*. Penguin Books, Harmondsworth, 185p.
- ウィリアムズ, R. 著, 岡崎康一訳 (1980): 『キーワード辞典』, 晶文社, 417p. Williams, R. (1976): *Keywords: a vocabulary of culture and society*. The Hogarth Press, London, 335p.
- ウィリアムズ, R. 著, 山本和平・増田秀男・小川雅魚訳 (1985): 『田舎と都会』, 晶文社, 425+xxip. Williams, R. (1973): *The country and the city*. The Hogarth Press, London, 335p.
- ヴィリリオ, P. 著, 市田良彦訳 (1989): 『速度と政治——地政学から時政学へ——』, 平凡社, 229p. Virilio, P. (1977): *Vitesse et politique*. Galilée, Paris.
- 上野俊哉編著 (1990): 『響像都市の地政学』, 青弓社, 200p. ウォーラステイン, I. 著, 丸山 勝訳 (1991): 『ポスト・アメリカ——世界システムにおける地政学と地政文化——』, 藤原書店, 385p. Wallerstein, I. (1991): *Geopolitics and geoculture: essays on the changing world-system*. Cambridge University Press, New York, 242p.
- オブライエン, P. 著, 筒井清忠訳 (1993): ミシェル・フーコーの文化史。ハント, L. 編, 筒井清忠訳: 『文化の新しい歴史学』, 岩波書店, 35-67. O'Brien, P. (1989): Foucault's history of culture. Hunt, P. ed.: *The new cultural history*. University of California Press, Berkeley, 25-46.
- 姜 尚中 (1989): 昭和の終焉と現代日本の「心象地理=歴史」——教科書の中の挑戦を中心として——。思想, No. 786, 26-55.
- 小牧實繁 (1932): 探検と地政学。地理思叢, No. 12, 1-14.
- サイド, E. W. 著, 今沢紀子訳 (1986a): 『オリエンタリズム』, 平凡社, 424p. Said, E. W. (1978): *Orientalism*. Penguin Books, London, 368p.
- サイド, E. W. 著, 浅井信雄・佐藤成文訳 (1986b): 『イスラム報道——ニュースはいかにしてつくられるか——』, みすず書房, 220+xii p. Said, E. W. (1981):

- Covering Islam: how the media and the experts determine how we see the rest of the world.* Random House Inc., New York, 185p.
- サイード, E. W. 著, 大橋洋一訳 (1991): 物語, 地勢学, 解釈 1, 2. みすず, No. 358, 359, 57-67, 10-22. Said, E. W. (1990): Narrative, geography and interpretation. *New Left Review*, No. 180, 81-97.
- サイード, E. W. 著, 山形和美・小林昌夫訳 (1992): 『始まりの現象——意図と方法——』, 法政大学出版局, 614+xx p. Said, E. W. (1975): *Beginnings: intention and method*. Columbia University Press, New York, 414+xxi p.
- 柴田匡平 (1994): 書評: Yves Lacoste ed.: *Dictionnaire de Géopolitique*. 地理学評論, 67A, 483-484.
- 高木彰彦 (1993): 地政学に関する覚え書き——地政学概念の変遷をめぐる——. 茨城大学教養部紀要, No. 25, 395-407.
- 高木彰彦 (1996): 地政学研究の課題と文献紹介. 空間・社会・地理思想, No. 1, 37-42.
- 多木浩二 (1980): イメージの交通——象徴と地理的空間——. 現代思想, 8(12), 16-29.
- 竹内啓一 (1974): 日本におけるゲオポリティクと地理学. 一橋論叢, 72, 169-191.
- 竹内啓一 (1980): ラディカル地理学運動と「ラディカル地理学」. 人文地理, 32, 428-451.
- 竹内啓一 (1986): ゲオポリティクの復活と政治地理学の新しい展開——ゲオポリティク再々考——. 一橋論叢, 96, 523-546.
- テイラー, P. J. 著, 高木彰彦訳 (1991, 1992): 『世界システムの政治地理——世界経済, 国民国家, 地方——』(上・下), 大明堂, 422p. Taylor, P. J. (1989): *Political geography: world-economy, nation-state and locality*. 2nd ed. Longman, London, 308p.
- ド・セルトー, M. 著, 山田登世子訳 (1987): 『日常の実践のポイエティック』, 国文社, 452p. de Certeau, M. (1980): *Arts de faire*. Union Générale d'Éditions, Paris, 350p.
- 成瀬 厚 (1994): わが国の地理学における文化研究に向けて. 地理科学, 49, 95-108.
- 西川長夫 (1992): 『国境の越え方——比較文化論序説——』, 筑摩書房, 292p.
- 西川長夫 (1995): 『地球時代の民族=文化理論——脱「国民文化」のために——』, 新曜社, 224+24p.
- 福岡依子 (1991): 地理学的方法論的反省と地政学. お茶の水地理, No. 32, 1-8.
- フーコー, M. 著, 福井憲彦訳 (1988): 空間・地理学・権力. アクト, No. 4, 44-57. Foucault, M. (1976): Questions à Michel Foucault sur la géographie. *Hérodote*, 1, 71-85.
- ホワイト, H. 著, 富山太佳夫訳 (1984): フーコーを読む——地下水脈からの手記——. 思想, No. 718, 250-277.
- White, H. (1978): Foucault decoded: notes from underground. White, H.: *Tropics of discourse*. The Johns Hopkins University Press, Baltimore, 230-260.
- 山田晴通 (1988): 汝の敵を知れ——戦時下のナショナル・グラフィック・マガジンが描いた「敵国」日本——. 地理, 33(8), 110-116.
- 蠟山政道 (1948): 科学としての地政学の将来. 社会地理, No. 4, 2-6.
- Buttimer, A. (1993): *Geography and the human spirit*. The Johns Hopkins University Press, Baltimore, 285p.
- Dalby, S. (1991): Critical geopolitics: discourse, difference, and dissent. *Environment and Planning D: Society and Space*, 9, 261-283.
- Dodds, K. and Sidaway, J. D. (1994): Locating critical geopolitics. *Environment and Planning D: Society and Space*, 12, 515-524.
- Duncan, N. and Sharp, J. P. (1993): Confronting representation (s). *Environment and Planning D: Society and Space*, 11, 473-486.
- Jameson, F. (1992): *The geopolitical aesthetic: cinema and space in the world system*. BFI Publishing, London, 220p.
- Nakashima, K. (1996): Political geography and materialism: towards an articulation of politics and spatiality. Nozawa, H. ed.: *Social theory and geographical thought: Japanese contributions to the history of geographical thought 6*. Institute of Geography, Faculty of Letters, Kyushu University, Fukuoka, 29-41.
- Ó Tuathail, G. (1994): (Dis) placing geopolitics: writing on the maps of global politics. *Environment and Planning D: Society and Space*, 12, 525-546.
- Ó Tuathail, G. and Agnew, J. (1992): Geopolitics and discourse: practical geopolitical reasoning in American foreign policy. *Political Geography*, 11, 190-204.
- Sharp, J. P. (1993): Publishing American identity: popular geopolitics, myth and *The Reader's Digest*. *Political Geography*, 12, 491-503.
- Sharp, J. P. (1994): A topology of 'post' nationality: (re) mapping identity in *The Satanic Verses*. *Ecu-menè*, 1, 65-76.

Geopolitical Awareness and Criticism

Atsushi NARUSE*

Discussions about "geopolitics" have flourished within the field of geography in recent years. In Japan, where geopolitics (*chiseigaku*) had been associated with empire expansion as well as German Geopolitik, the critical issues in geopolitics were not for their own features, but how they reveal ambivalent aspects of geography in general. In particular, two critical issues in geopolitics, political intentions and subjective interpretations of the world, make us realize that geographical descriptions may inevitably be political.

Today, the term "geopolitics" is not used to designate a branch of study, but has a variety of contents at the general level. In this paper, by referring to the definition of "orientalism" by Said (1978), I suggest the necessity of analyzing geopolitical texts from the standpoint of criticism. An author of a geopolitical text is not an individual subject. Whether (s)he is a politician or an editor of mass media, (s)he represents the government or nation under a wider umbrella of ideology. From such a viewpoint, we could establish a research agenda that critically examines various geographical descriptions under the term "geopolitics."

Key words: criticism, geopolitics, ideology, writing